岷江入楚

紅梅

第四十二

特別
ヘ 12
4604
42

88
112
4604
42

紅梅
按察大納言家并子達事
北の方系図ニ女子二人麗景殿女御中君母儀也
当腹按察君男子一人紅具君アリ付女子一人
又し宮の御方とし申へる人也
姫君系図ニ系図ニ 第十七八ニ 麗景殿女御也
中君を宮姫君一処随身御所也
此君達を源中納言といへるはあやまりなり源中将とく
つきやうの御方雪大臣任右大臣按察大納言任右
大臣ニハ此秋薨但中納言以前也これより御方を
右大臣とつさお梅のおとゝハ按察大納言とかさ
紀仰も鼻ものおのる さ これは源中納言とハ
中へつかるゝ仁も内皇の御方にして源中納言
といきも物語つくるれ諸の御よ人のかくゆゑ
私此事也ハ如此まて任より不給おくの物語妻
去の事ハ此暑かハ薨の事なるとも記さ申さるゝ也

小汀文庫

48 3711

梅察大納云打梅花此詩ハ長公為此後歟長戸ハ文
長戸ハ文金懸文燈表不可引中表可為歟
梅察大納云歟梅市ハ
長戸ハ文ハ数ハ
金懸市ハ八文燈表ハ
白長戸ハ文金八文燈表ハ
打ハのちなれハ梅花の木ハ春の秋なるハ

紅梅 第白文並一 花以類為巻名或行川紅梅ト云ヒ
梅察大納云折紅梅歟長戸ハ文
以巻別して梅察大納云伝ヒ云ハ行川と並の一
二ヲ巻定ハ並中為行川ハ姫宮住給ヒ中央宮寺
相続ハ中納云以巻ハ姫ハ原中納云とおれ
ハ行川の次ハ梅察大納言
大臣ハ行川の次ハ又行川の末ハ梅察大納言
行川の中央ハ又梅察大納云と見ハ下絵以巻
梅姫巻の姫ハ其比の類人ハ梅花心ハ
と云ハ為し並中為ハ原中納云とハ
行川姫ハ梅花
尚ハ姫ハ
長戸ハ文
梅察ハ
信角 同門
白長戸ハ巻に並中為ハ十九才の正月の
ハ原中納云とハ十九才の秋
加賀の並白長戸ハ又字流八方の姫ハ

付 付るの山巻に未しらみ桜かりの巻と同内の
寺 山巻八墨の墨し春のるあり自天武巻の尚内の
秋 自文の巻に墨に一云或行川を一の墨ともりて
墨幼かの内ちりて
川ちに光しちちちと
ち但侯の墨ちいつ
三ケ年の墨あり幼巻と
墨に一三歳すと 花月三ケ年
幼巻ちりに巻とに十七ケ年の月
河面ちに巻に別に梅宴
第云山新金言紀に年紀の新乱一向ちと内
ちすちをりちと
但年紀の混乱一往取宴
一行川取梅ちて宣次第ト云内

一紅梅行川と三ツ下立ちふる
古面行ちと云ふ
行川 中将 洪
墨四位侍従 中納言
山巻ノ宴初ヨリ 墨 源中納言ちあり
紀ノ行川の次ちみ
行川孫と梅宴天内に任大臣 紀内天梅二墨
取給云内巻と年紀ノ紀明入ちす山巻に梅宴
の侍行川行川右大臣ノ別侍 紀九月内代
ちり今て下見ちる
山巻に行川の中史 物語 権中 徳角内内
山墨次第お侍ちす
江墨 嘱景 勧盃ノ内宴内中未お遠 倫義
山巻山下ち 嘱景流通ちる

その比あせちの大納言ときこゆるは故致仕のおとゝ　此一行
なりうきよおはし大成の巻のうつしは
秘 此時は紅梅大納言也これをおほ宮紅梅按察大納言ともいふ
ありしより人のひかりをかけるを也
箋 秘ノ義においてハ紅梅大臣の別伝ありこれは按察大
納言となる時代よりの事なるへし　年紀ハ此后一向ニ
先を略すへし
弄 後には紅梅右大臣ニ　按察大納言にて任大臣にハあらさる也
在其末ニ太政大臣ニ任す同時ニ左大臣ニ昇進ありしの中
納言なるを花ハ行幸河の末ゝし推量のあやまりも
同時也　別ニ注ス
箋 以後御鍔を三処にまゐり紅梅按察大納言也とそ
皆かくいへり仏の御経の経に余時よりくるしく此三
万よりけふは佛の会場をしつらふくてかくなり
箋 致仕大臣薨去のゝちにりし後てえらりたり也
紅梅ハ致仕の二男柏木ハ次男二条の御国の御末

ことはりくるしう　箋右にしるす
秘 榊巻ニ高砂うたひし人也
りやうのはなくなりあひて
秘 係はなし　箋
後のおほきおとゝの御むすめ
箋 髭黒大臣也　後太政大臣　野路太政大臣為縁也
河 野道太政大臣　髭黒大臣一名也　素寂抄云野道の字
人ともに物つゝみするを世にいふ宗成の卿まてを
もてなす物おもへ月卿なに野道となりけるは作て
位をえ給へる双盤大臣　麦野　一名野道大臣と号とこ
或説には後代の御ものさわ也　今上后の父にて太政大臣
二人也　致仕太政大臣　古裏葉子伯ニ致仕　また髭黒大臣　紅梅ニ太政大臣ニ任
先也此後と云元服して此物語中の太政大臣二人也
引又大臣二条太政大臣六条院　致仕大臣髭黒也云
なかにも後也　右今集来にいまきて
猶とかけるハ宇宮の事ともわすれす延喜の比太政大臣

二人之内清原不辞官ゆえ
右大臣清原夏野　正小倉王ノ弁正男也　延暦大臣
又号野宿大臣　延暦ハ仁和ノ年号　清原野ノ宿ゆ
秘　横田ヲ以テ野宿ト号ス　何と自況ありけ所歟仁ゆ
まの宿ゆ　みなもとまろ　ありけ年
をかのうへ
筆　惟喬親王　平ノ親王　何ノ家ノ同ゆ
寺
まさもり　ふるのたかむら　ふるのたかむら　人
すまの宿ゆ　ふるのたかむら
成ゆ
秘　吉木ノ宿ゆ　紀又ゆ　筆
紀ノ宿ゆ
筆　業ゆ　山文　業ゆ　山文　業ゆ　秘
何横田ノ長女　文　宮ノ
ゆ

秘　横田大臣　筆
何横田大臣ノ宿ゆ　秘
横田大臣　廣宗　中文　西ノ宿ゆ　何　春宮ノ
山二人　女ノ宿ゆ　小方ノ服
筆　大臣　山　章　句　文　ノ　人
二文ノ宿ゆ　女ノ宿ゆ
秘　業文ゆ　筆
秘　横田ノ宿ゆ　何　女宮一人　ノ宿ゆ
ノ句文ゆ　ノ宿ゆ　ノ宿ゆ
筆　女　ノ宿ゆ　ノ宿ゆ　人
ノ宿ゆ
ノ宿ゆ　ノ宿ゆ　ノ宿ゆ　ノ宿ゆ
ノ宿ゆ　ノ宿ゆ　ノ宿ゆ　ノ宿ゆ

そのくはうの人
母まことこれちれにつきくれへくねんころさらい
へとも北方のよくまてかしあらふとや
かほうたくるしかる人き事も
人のおん上かきり
それしくいかあきらけきうつ
世上の人おさなきのうさんや
枝枝乃性一隅と云れへ上方姫君の性はなやうなる
なめるとけさき様にて知へし
ちてありしけるよすかし
るなもや
其橘の性ある二人宮北方ともに次と君をし侍り
自みれて上大納言とのへおほいへ給ふ
女御の君也 弄嫡女也 箋 後に廉宗姫女御
あり中の君

卅二人 於小方腹 箋 廉宗頼妹弟君なれと中君云
なんかしまさ宮の北方
帝にて宮の北方也 弄
寝殿の内の東のかた後まて晴のつや文武故の
やうちなるへし
文宮のかたをね
先の宮の北方のあきをき云
ことのゝことのはかなきのやりけるや
文宮も 箋 祖父宮もとの北方かりたりけるや
失父 箋 先帝 式部卿
それは此三ヶ年より北宮内のよう有りあつまれや
此頃是の 祖父也 此宮北方 弟祖父
まことしまいりしき
女君へけんいや
さこえ北の人おほく
そのことをかくりへおほゆまや
内大人中 北の御中宮也

春宮ゐたちの御はいとの〳〵め
秋 少将の世也 并 第三條上服
ゐをいとりてやゝ白人ゝ
ゐのゝ人〳〵をゝかゝゑまきゝわゝすゝ
十七八のかゝゝて
秋 紅梅の橋也 并 第 廉宗卿とゝ
中宮ゝゝすゝいて
并 ゝゝすゝいて 此歌〳〵
春ゝの宮れ梅〳〵ゝゝふ
秋 句宮の第
ゐの口の宮ゝを内ゝてみゝ
秋 宮木殿の腹の宮也 句宮ゝまりて腹ゝ花
第 宮梅乃一ゝはこゝ宮ゝ宮ゝ
せゝゝ紙見ての見い
秋 句の伺
第 宮殿の腹宮ゝを殿ゝ

さなんとゝ
秋 宮梅大臣ゝ宮ゝ
いゝかゝれゝ
秋 宮梅大臣のゝ
春宮の腹ゝを
第 并

大君春宮の第ゝのゝ
ゝゝの弟乃腹ゝゝ内ゝ也ゝ
同院左大臣光嗣也 東代ゝ光宮晩の左京のゝ
腹ゝゝ母也 上古ゝ祖宮舅
源氏のゝゝ三ゝ三位のゝ
位をゝ以春日大明神後祈下春神宮
清宇長暦三年四月春日明神後祈下春神宮
度ゝ官幣不信ゝ依北方宮皇后也 依ゝ内大臣為過云
女可入内ゝ由被宣下ゝ十二月内大臣 裏入内
為節ゝ業長暦の御ゝ為依此度ゝ我
光宮御ゝ御ゝ

弄
斎宮の御禊よりのちは秋好の中宮とよばれ給ふ時
前坊位太子東宮の御子なりしも又伊勢斎宮なれは
とて同文の中に見えたり

秘
秋好中宮は前坊の御子なり 女三の宮は源氏の御弟
前坊の御子にて中宮となりて伊勢斎宮まで御母六条御息所なりき
故にとて此冷泉院明御時に御養子となり源氏の御子なりし
前坊の君は又前坊の御子なりしか冷泉院の御子となりし也

箋
斎宮合御の御母代よりのちは伊勢の御斎宮にて百官
の御子としてのち前坊の御時に三二三人の御腹に前坊の御子となりて
斎宮の御子御母代の人入内あるへき也 故に斎宮ありて
斎宮三后 女三秋好中宮若菜下に明石中宮と
つきて源氏三后也 花長解給ふへし おほく略し
これらの院の女御の御方をも
前坊位太后ノ御女院ノ女御にて斎宮御女と申さるべし
秋好中宮よりのちは三后の位なりしなり

箋
いつくしきおほやけりしなる也
故にかく 前坊の文殊任君團院北家 女御にて斎宮御
あくれあのなりし

箋
御也
此のころにてそのうへは
箋
古木相乗也 女御の継母也 かくて中宮御かくれに
斎宮へ参らせたる斎宮継母にあたる上に御身にて三十歳そ
まゐらせしすかはり

このたひくるまんとして
秘
前坊や故桐の君春宮へまゐり給ひにしも
弄
前坊のかくれや
箋
此のはてには
秘
中の君や
弄
西の御方に御まゐれはるかにつよくあひ逢ひてかくなく
小父大納言ノ心也 おほかたの君はかくれなく哀
ひとつしのいはれ也

秋 黄昏の時也

第 ちはやぶる

第 宮所より中所をみやの方にしめをはりて

秋 京の姫君

第 文武百官の面々まいりあつまりて

秋 五摂家の用意ありて宣旨

秋 しかるべき人々参る 平四郎大夫つまて春宮参り

しかるべき人々参る 平四郎大夫つまて春宮参り

りかの河原にて又板ノ間高

秋 五摂家用意に相、元の下ゆふべ元はまのるも

秋 定まる差ふる間

秋 四条の河

第 夫婦乃ちはやぶる

第 当の一朝の後行ちをゆふ

第 ちはやぶる

秋 五摂家の

秋 ゆふ

秋 ゆふ

第 ゆふ

秘 世上の仕合守るとは
[illegible]
第 徒又頭田の居る曲るとも
[illegible]
第 石橋長女ちのるる
世中にうまうらは
秘 和女まうくとあるまうるとも平
[illegible]
第 いと天廉京取者文一家りれ以奪れ婦山
の者文よ家り[illegible]人ぞれやま間の恐怖と
月ろ行ちく物ふ[illegible]
秘 石橋大臣の伺 第
私大臣乃者文家りなとうまれるとも
[illegible]
秘 中ちも 第
[illegible]

[illegible]
平さうとあり
秘 毘盟を洋して
第 未就つるる毘ぬうれわるとも系ぞるとして
初ふるれとも大ろ
[illegible]
第 上ノ翔こるる河所のうまとあり
[illegible]
第 石橋ちりうおうれとうとも
[illegible]
第 以翔一切を適迂して時節の彼七金屋の世ろうの
返るの以通の百姓橋元樂と見及ぶ汁言も
[illegible]
きてしのえうりの
寿 伯牙へんしあり

又ち

かすみもいまだきえぬくは
筆 流るゝのすゑすむなり
ともしうける角て
筆 天の水花の琵琶の音
松ふ条院のはつるん
添ゆ也
九のおもてなん
少年也弄 少年すみや石よふると消也　私ニ又名ふに弄
源中納言
秋 廿荳昇舟のてまてみなり　弄梅も名花なる也
弄 荳中納言のうし行川の弟子にて弄梅もと久しき
弟子ふかれとて名あるのてつかり又称す
中納言とも称す句を書く作者まで混乱せり
別に注せる有
岩乃下哀
句ふ也
てつれすてふよひける
弄 あまをするはつよかくれ候也次の洞にふ波めかしうかく
うるさん女の袖とも中くゆしかなきんと互山うや
松云小田高みうとくつうくねは女式哀なれ也と申ふ好ん

うり先よ相好しあそ行おて下れいと弄
おもしよいとうれ好事
筆 琵琶ハ橋そ本くおつる花や丸き筋と云まる
ともの中なうや上の白萱いありあらて是ハ宗ハ
もまけなれ作りき一行なそやりうれいしも宮は
少年よそそ耕ゆらと
弄 み旅いとの丸つうり
筆 琵琶をうまくと云
ふても筆する也　一切ノ管吹物をし笛と云ヘハかとり
又をとりんとう一弦　一切ノ絃をむしくと云　琴箏
てみよのたそうり　絃ハ胡琴といふつきまてれ川　きんすうのもく
いましく好し
とも比巴をのつくくてうつるも
ひつるとして丶行や形るを
筆 たの手丸熟してよきつなとと云
なう行すかららとのさまうり　竹柳子

柱撥　弁　ことを弾しならすなる

集 左の手にて柱をゆるへ右の手にて撥を持て弾ならすと云也撥にてから
ころもにくきりのみくわをきてうけあふてふ中にやう也
弦とまりれ

集 此色を云給うつくしひとつを給まへまいりもとも
みしらすつしとともにまてし心にかはせてめくりれと
集 物にさへ云ふにはまれ字又に第三の字脈也三の
衵まかし色打し色なるの記也せんとあれさく給ひと
かみとらしと云処の錦也衣被へ衣の給方の女房よなきちら
つやくさらともなきをなさと上臈なるくいうて作上つきの乃
ぬるさに打し色なとお柄れまりぬかんへえんなるも給せ
すくてみてまつりてとちての字濃くし
又三の字胁字によみ付にての字を清てよみぬれは
敷 秘 給云にかくれぬなと云事也勞位也難有し
やふにまてとしもたつけ字也心（にん）にまうちかなりとは打
とのほまへわへまきことなれとゆしてみしなぞてまつるの

今やかて給ひさる也奥の御かたにはまへかわりてかわり
これもお御へはかとりふえうりて
さうかへえ
秘 大臣の御
ゆの君少へまいりんと
集 お柄の子系図にハ大臣となる　板挽上臈
よめする
は 宿衣姿
秘 直衣姿也
集 直衣也けし時ハお殿をときをつくる也　弁
ゆきうらのりしきたまへて
む 殿上の童ハ朱常の時纐纈すき色をとらうとなとの
かすなるハ重衣をいふを時にはくつくるれはなすくさと
きくへる也
れいけい殿上ほととつて　弁　ほかへのかとつけし事
秘 お柄の嫡女五字へ参りし人　弁
集 かくおさしめて五節京殿とまゐり

む
東家の茶筅のことし

ゆつくりとしてふくよかにして
秘 第
書方によつて又いふ其志によつて
品格をさだむ　小前ともいふは春家の茶筅かはりて
其外に見まちまちに随意なるへきことあるへし
上の順よろしくかんさ後ち也ぬ　さうなくて
花は春家の作者とすれ　もうてん小前のことくに
へ後家の細也ぬては春家より小前の其随意よく
かさこし但又格材のやうには往還とあり（て）に小室と随
定まるは此順にて小前へ出つる第一は云へ了す百拾句
成としてにうりよかへり作ふ叶のあるよ分別出来
真よまて小室まりて作へりとも是は百句欠に過申也　能
眼を付へし
此は第一句寓しとらて無原宗匠へ出つるは小前へ
作るへし後によみあしきまてよりは此順茶筅の意味へ
其作者のまきまるよの格々するまとおもれるとた
アト

かつらるこそ順格あへて前にわたる又小前内よりかたらへ
の往還ハ直へ了す又是ともうへおうちなかへ是にみへり
ハ
と家れ作りる人の梅中挑への小前当ち位こて作る能
いおもれもを一順中へつきくうへよう作よ此能寓なり
よろしく定むへし
此ものは作り　ものよ
第
おもん（ご）へ作ぜん面白よりもきより
つりさしつくれ
第
もらは是なるも
うらてうかふきを作ふ
めしかふべし
春の洞よそ
めてわざする
何し会春子とかるとや
第
むつきわかせきせみへ
之作者へ梅の中作りまそや
つかびまだいとうく

何凡評

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

九条殿記云天慶五年二月十日雖甚雨依之上例引
青馬今日酒盃十一巡王侍有酒気吹皮笛事也報之
歟五云年来更不有和之対今日似古対甚感仰也
原本倚要云五季戸主記為東之
早鰹ゐし皮笛新撰系記
中古自吳朝笛を傳ちり皮裏上左を拍拍大非
未詳成皮笛し疑ら
胡角一名胡笳 胡角則皮笛也
私ちりふえいちるもくも
乐のつまよ彩ちるこころい

春風北戸千蓋行曉日東簷一樹花 白氏文集
拾遺抄名に百花あり

秘寒の名とふたり
ちるへるしるして
秘夫義皆引之
あるれ光陰ゆく
昔のすをいとあり
りいるそるうして
さの木巻ちるるゆうる
私ゐ柳ゆ方ひゐ若の比陰ゆ
をと多戸て文よのちく
いゐちり
今上の文ちる陰の街孫文
ちりたるる
尚守と昔の西ゆを
ひいこまつ

まうかすんのことくれしまてまうりて
昔此少人没後千年にしかと人のらに遂に世に跡るは多かれ
まぬすつ余ルをいへるとも以偈に文を奥に渡しつと申
いるかもん昔の記ぬまいつうこそは以家わりてうい
心一句尋妙也　昔ハ亜りとても又かつてうれ候わく
りぬとあすと也句尋ると没後の出家ありはゝ是
仏の之は仮のまんおゝ存すは阿難の遺えを存しんをうるし
ふるへうかくうするゝ一きをなりたる後ものけりをを
大論云大迦仏入涅槃しん阿難登高座法住集法経
時具形は仏の衆會疑佛再出給　私称し
阿難ハ未訖四果之人也仍羅漢の出家月之具時阿難
自称現證四果分ハ羅漢ノ位に入ル事也これなし羅漢
の位也こしりトハ阿難まとこや
阿難陀尊者佛叔父白飯王ノ次ノ子也以佛成道二月
八日生即詞逆之辟也面如淨満月眼若青蓮華年
八歳従佛出家得皇鞨磨具足戒多聞第一年三十一

為佛侍者聞持法藏至法華會上佛告阿難汝於
未世當作佛號山海恵自在通王
佛滅度後大迦葉結集法藏選千阿羅漢令阿難
升師子座宣說諸経
迦葉告言佛一所說法一言一字句便有聞時阿難最初
出経
第一胎化蔵　第二中陰蔵　第三摩訶衍方等蔵
第四戒律蔵　第五十住菩薩　第六雜蔵
第七金剛蔵　第八佛蔵
是為経法具足時阿難發邑唱言我如是一時佛住所
居處　迦葉大衆皆悉墮涙咄嗟无死如幻
如化昨日見佛今日已称我聞　処胎経
阿難身与佛相似經佛三指
初登高座衆起三疑
或疑世尊重出
或疑阿難成佛
或疑他方佛来

反唱我聞三疑俱遣　附句

上の句よりあらはれ出候ほどに是ゆゑ[illegible]人の

[illegible]てまつりてはじめて[illegible]の念[illegible]

らしかし　此脇座の人甚深也

舎利弗目犍連不忍見佛涅槃遂先入滅七万阿羅漢

亦同時入滅時四輩弟子莫不荒乱如来以神通力化作

二弟子在佛左右衆生歡喜憂悩即除薩婆多論

右以上第

まことにうつろふ

必　中をとかして見るへきもの也

[illegible]て風のよほとすくの[illegible]

何見也待や　[illegible]

先の[illegible]

秋　[illegible]

哀　[illegible]

第　花の[illegible]

此句　[illegible]

[illegible]

や

[illegible]

[illegible]

必　句[illegible]

中[illegible]

必　句[illegible]中[illegible]

このハなといとくハまろてかし
句家の間此足ゆ子なのるゝとこしれぬふや
とくまりおゆりけし
呑足の兎茶や
内かして此やすき百ぞ　筆
必 二条院や
うつしひ川へえ
寿 句家のはともの南天や
春家よハいつと浚すじ
必 句の閑や
ときとゝれく
必 わび色のまゝり川へゝるや
青 呑梅の只人と春家れまつり川しのわねの山栖く
家ハ川なりしよ町と浚わりとや
筆 呑梅の足云ると春家ま平生花をの仏くわきるおらし
の婦れ女栖よ附としれて候こうわるゝめと　明呼

してのみふや
契 ゆれよ付をとゝれくとや
まり色れへうしゝり
必 若兵の相
筆 黒也まり足や　昭近の人
おこ更よりしりと
必 句家の派まへろいさろひらし足や　英
筆 句家の派ずよ家らしとや幼君の人れ魂よ春枝の
用意や春家のえうしく先へくくをとくそれ
とゐせいは家へも同おまやお荷りし半すべきとの用棒や
しきの句ハ此巻の文章や
まれ色ハ人家ふしと
必 句の閑呑梅大氏をとうえ所や
ふるめしきおりしすそて　筆昇
む 花呑宮家の姫君れ哉　紅梅の唉ろ家の方に住むか
必 おりしすらとハ宗そておしけるとのめへり

いつとなくゆかしはるかなるかたをうらやみ
第 百姓の人たちをうらやみやうらうらの家の
ふる郷をかくのうちにとりそへてみるもの
必 芸亭の街也 先のるも
このうちにをそれてまつれい
百姓の人たちのわしれ
ど 上をうらやみうらうらうらうらうらうらや
うらやみて
必 白雪
うらやみくはふるふるふる 第 引方下句
実 心何ゆゑ引き事見よ 白面
恨テはナ人ノウシナリハイカニ云ウカシモナカニシ山ニ為恨テ
はナラハタノミモ有ニシキニ色ハイニ又街文モツカハサレ五ツタ
ノミアル心ニカハノ恨ノ引き事ナれハ 上句

枝の高ふかきを分しも者と
第 枝ふり 英色香 一ふハ
九 花上白梅 江 花の父ふり行て春ふん白き梅ふハ井ふ行
ふ 実 ふるふるふるふるかしこくとるふるへくる
実 ふをこくりへる 引方
第 冬をこくりへる
必 梅を詠して
枝ハ父も長を見
行 枝撰 花の父ふり行て梅
秘 第 第 若載し
ふるふへて 父ふ
ふるふへる
白雪の春上梅を書しるるみてふり
こしいなのかれ父ふり
第 白雪内上花宿を子れ父て
東雲ふしてんまふ

藤原俊成（お師匠様の歌）

花もちりうせぬ

句文の秘の事をしへるなり

この世のわるい若者よりは

文の先なる句文を重しとのへり　第五

ちりうせぬ人へよりわ

必　歌の句　第四

同　第五

信明集

花もちりうせぬ人へ

わすれ草の月と花を用ひる

秘奥用ひし　ほうぎょう行人

奥　わすれ草は人を忘れかねるとかまりり　紅葉に行人と山方有なれん

奥　花を月ものに用ひし

ひつ方を問ふ人へ

必　お師匠様は歌文を句へてそうろうまの

ありとも　第

奥　お師匠様の人の中　文を句（とゝのへた句）文の文の先

第　ちりうせぬ人へ　信明集　どこの国

ちりうせぬ人へ　花もちりうせぬ人へ

ちりうせぬ人へ　第

必　句文の心の文の先をとゝのへり

奥　句文の心の文の先をとゝのへる心文の

同　句文の心の文の先をとゝのへる心文の

秘　句文の文の先と句文の句文の先

必　秘の事の句文の句文の先

秘の事の句文の句文の先

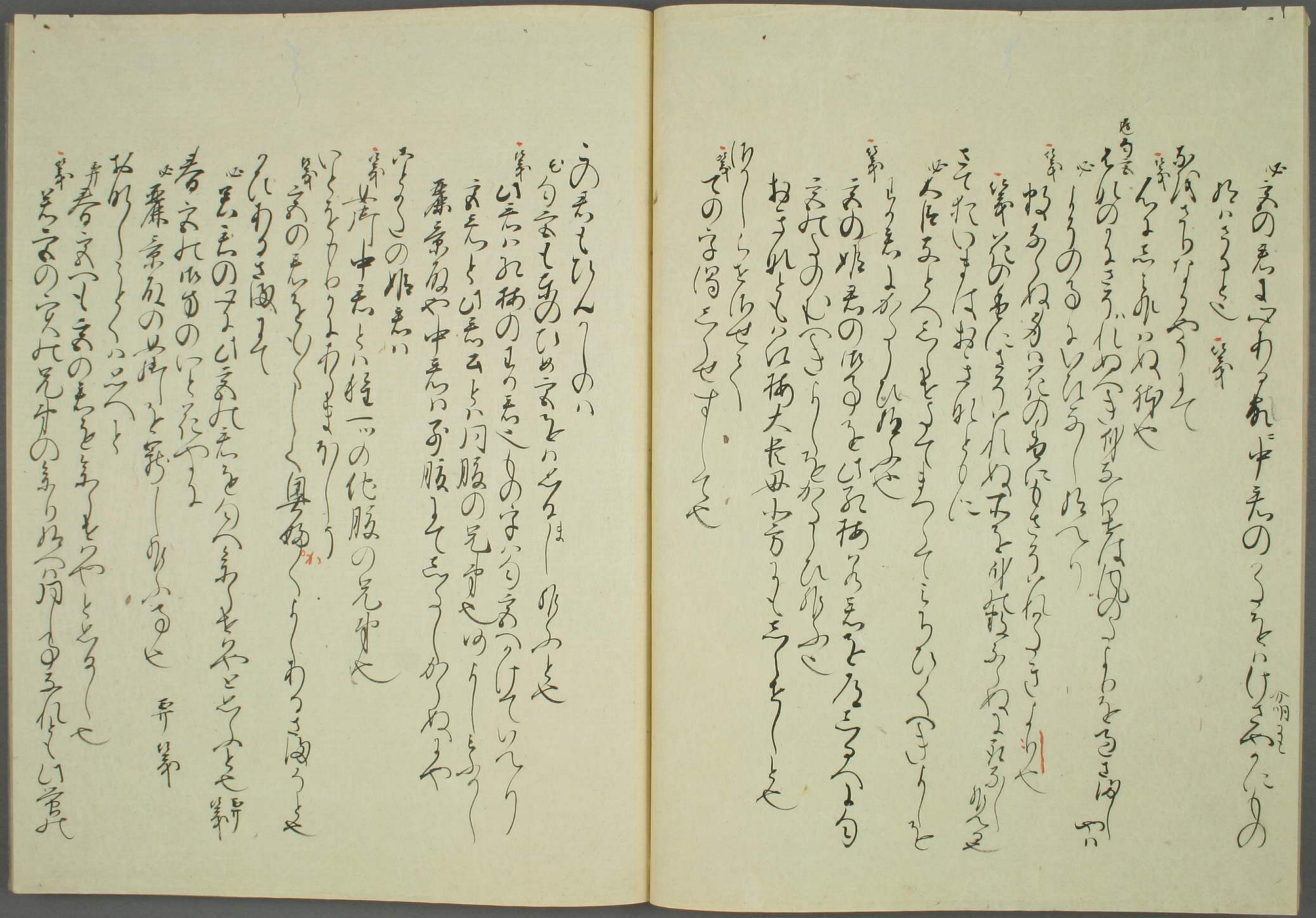
ありて　秘の事の句文の句文の先

ぐひどの国　第三　句文の文の先

又事の秘の句文の句文の先

いとう字清　第

ひろうするげざやうにものの



姫氏をとくあるゆゑ八言文（まことに）日ことに
公の文をとて
第 此文の姫氏（句文）なれば言文（まことに）
ものつくりを美氏の心ようれいくとも
文（まことに）なれば心ようれいみをてまつる
必 文（まことに）
第 人をとてまつるといひすてるゆゑ氏の俗名題
あるれいまつすまてとも中氏を句（ものつくり）
れをもあるこころもておもふ
れりけふものあるかた
必 大臣の河
つ国に行ふるかたをとり
たのおもふるかのみをとり
必 少将やお拾ふ臣のみをてまつる方をて実はを
また 拾ふ
第 太のたく　又秀　たふ

第 お拾ふ方のおよ実はをてはかれるかたを
いつれ拾ふ敵かを又をとりてあるとをとりはかを
あること
けい 他人異化 越人 喜 他心 第記 異意
ものもの
句文の風流をはりしよりこころ国と七現ふ実
はをくはりしなる
三ふくもて
けい 後言 こりうゴト
けいもまつもはふる文
なるなるもまれわるはる又拾家より句文八行
あるわるこ
記梅大注
のるりくるるの姫れ宅ことふるはなをるこ
けい 年の色心万葉 ケイ人とり
必 句文八天地のるりしあるこ国の拾と句八
をまこと　第

[illegible]

[illegible]

[illegible]

必和歌五位の句さうるのわるくとも
なれもまくらん
第たまくらとゝかしわ又一向よい字をきまくら
ゝしいかゝ也とゝかしわるくなりけりなをくゝ
保中納言
第菅原やくゝ一向人名こゝ意のゆゑ一向凡人より
わるくまた云の花抜ゝとも
必和歌ハ云ゝ花ゝ多れとも
しりいなゝ水ふゝ
第
句ゝの天性の多野ゝ
抜利ゝ又ゝの天性ゝ意ゝ
ゝ和ハ抜ゝ
ゝもゝ
この文ゝ
必句文和を作ゝ水ふゝ
実

ゝよくゝ
第句文一中ゝ
文のゝをいわゝふゝ
文の作ゝ
必文和の作ゝ
必文の見ゝ
第年齢も和歌ゝ
作ゝ
必いゝ文の名ハ父文ゝ
和歌大九の作者ゝ
ゝ文ハ作ふゝ
ゝ文ハ作ふゝ
ふゝいゝ
ふゝ
必句文ハ月の名ゝ
第祥の字ハ二十七句文ゝ
ハ和歌の文ゝ

大内云々者つくつけ
必 おなじ大臣わふつとに口ふ心しまあるとも受けぬふ云
ゆくしまをみるに
第 小倉の月を
ふけ野ゝと集
第 なをとうのゝ白雲のゆくまつき間ゝ
まけしのぶんうして 白雲のんゝ
行うゝ人のわりさ
必 わ方もれ(き)なるゝ
おしさゝとゝく
要 白雲のゆくをふ
人の雲の姿ゝ
行 宇佐八幡宮 羽前国 赤八幡宮 参詣して雲通行佐雲中雲赤佐角
是七但雅なしゝ行宇佐中 ヤドリ 有り
要 宇佐のゝとうくゝ雲の姿ゝのゆ雅なまるゝ
ゝすのゆをゝ ゝまるゝ

とゝり 橋姫 ゝ二ゝ雲七雅なゝ雅なゝ民部ゝゝ
ゝれゝ間の雲ゝ雅なゝ雅なゝ寒ゝ同雲ゝ別ゝくゝ佐雲
必 宇佐の中雲のゆゝ雲ゝ新乱ゝゝ
ゝゝ佐ゝゝ雅なゝ寒ゝ
第 ゝけゝゝゝゝて雅なゝ
ゝを年紀新乱ゝゝ
ゝ雲代の雲ゝゝ
ゝゝゝゝ
第 雲の姿ゝのゆを雲
ゝゝゝゝゝ
加 要 ゝけゝゝゝ
雲の月ゝ雲ゝの姿ゝ
四 雲ゝ雲ゝゝゝゝ
必 四雲ゝ雲ゝゝゝ
要 ゝのゝゝゝ
ゝ佐雲のゝ

ゆうらう流こ